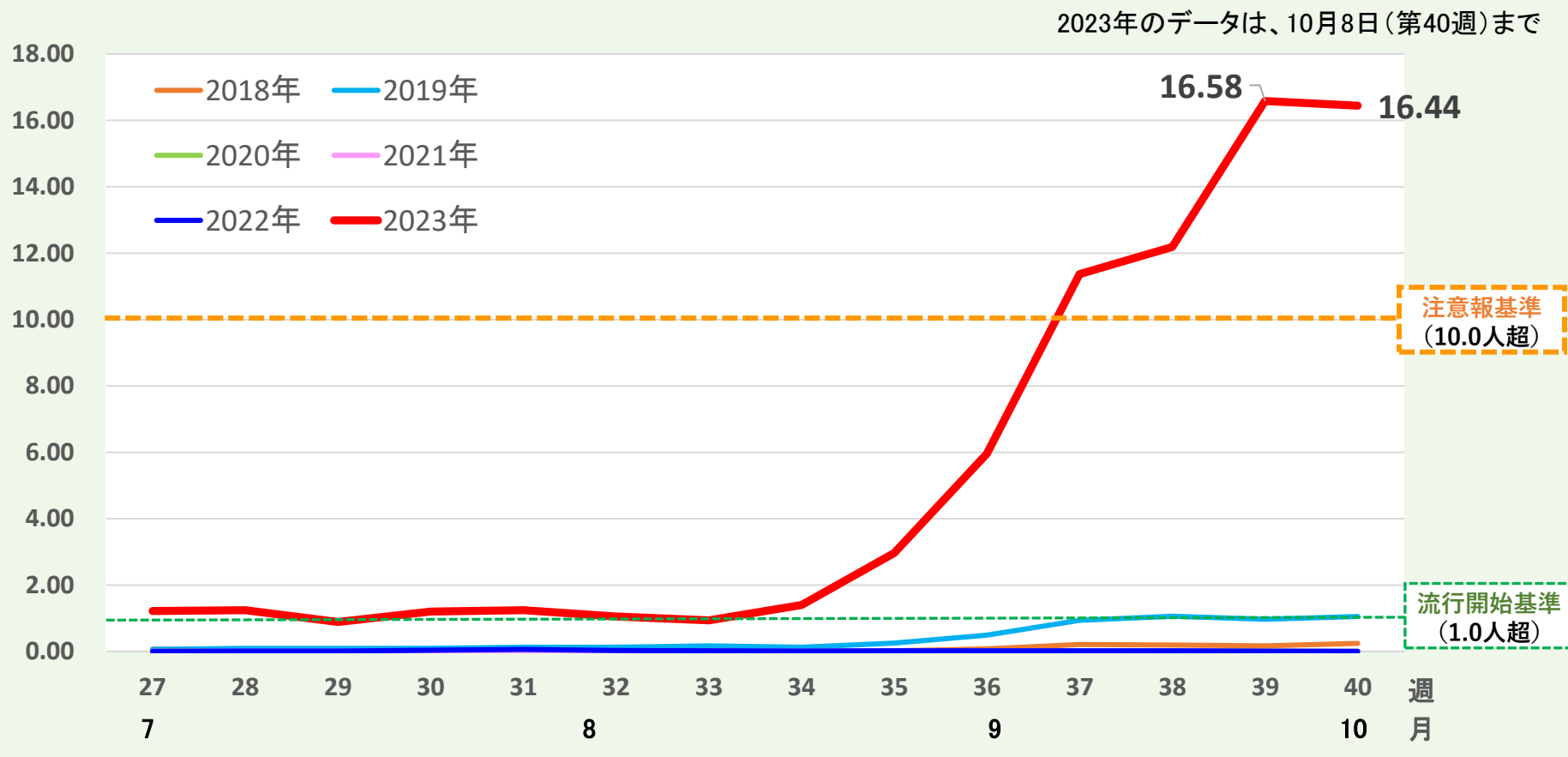


都内のインフルエンザ 「流行注意報」



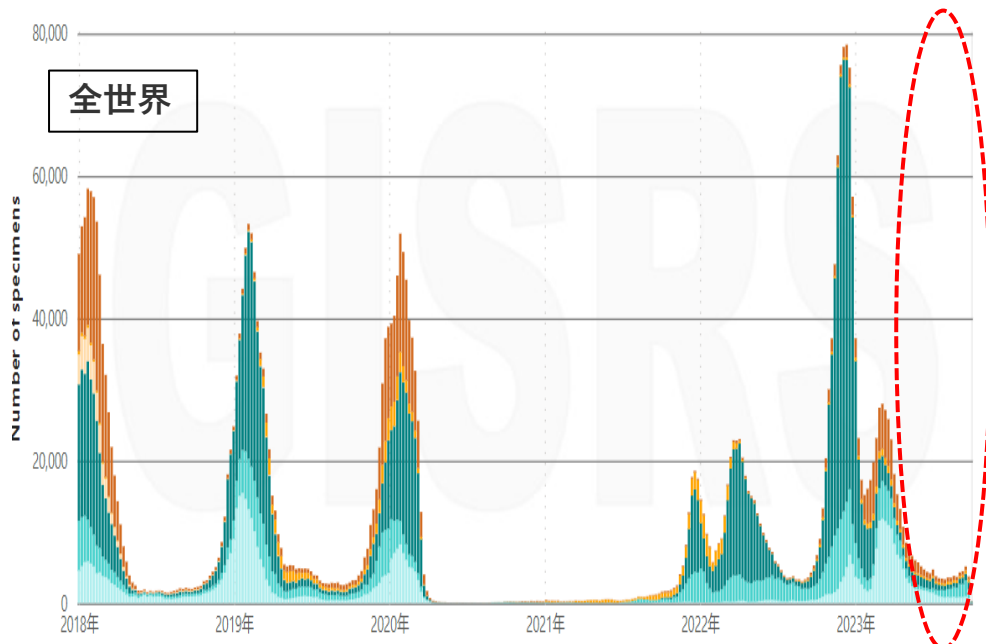
換気や手洗いなど、感染防止対策の心がけを！

インフルエンザ - 世界のインフルエンザの流行状況 -

- 世界的には、インフルエンザの検出数は低い水準で推移
- 北半球ではほとんどの地域で低い水準であり、南半球は概ね減少傾向（これから夏になるため）
- 東アジアでは、香港で高い水準、中国南部でわずかに増加
- 東南アジアでは、高い水準で推移

出典:WHO Influenza Update 2023.10.2

参考：インフルエンザ流行状況（2018年1月～2023年9月）

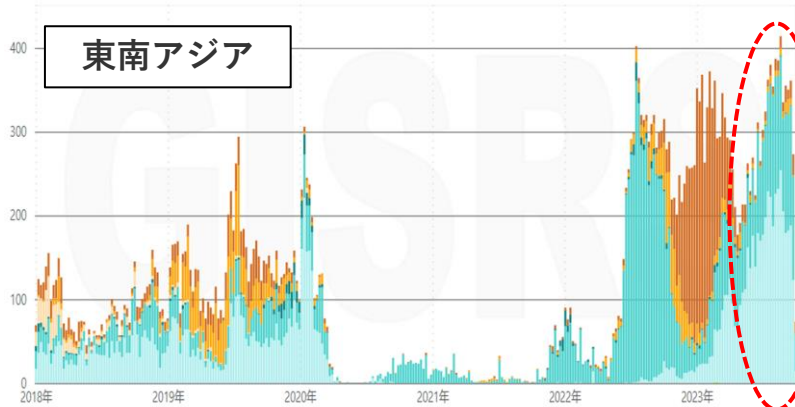
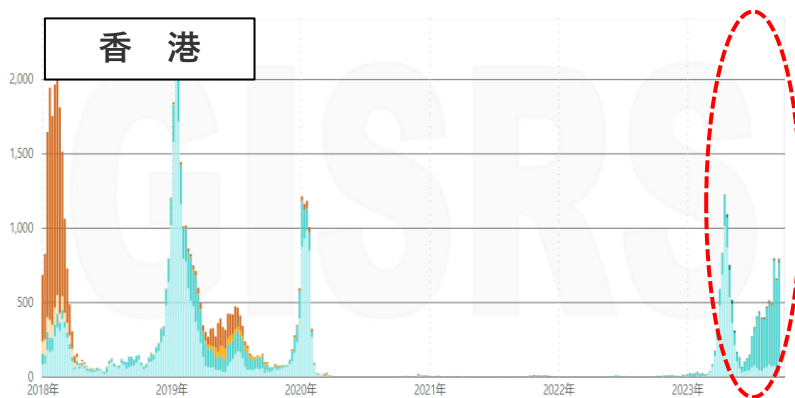


インフルエンザA型

- Influenza A not subtyped
- Influenza A(H3)
- Influenza A(H1N1)pdm09
- Influenza A(H1)
- Influenza A(H5)

インフルエンザB型

- Influenza B (lineage not determined)
- Influenza B (Victoria)
- Influenza B (Yamagata)



出典:WHO FluNet (<https://www.who.int/tools/flunet>)

インフルエンザ - インフルエンザ対策に関する国への緊急要望 -

要望の背景

- インフルエンザは、例年12月から3月が流行シーズンであるが、全国の定点あたりの患者報告数が4月以降も流行開始基準を超過している状況
- 都内の患者報告数も、流行開始基準を超過する状況が断続的に続いていたが、8月下旬から急増し、「注意報基準」を超過
- 新型コロナウイルスの感染状況は、直近では減少に転じているものの、5類感染症に移行してから増加基調が継続し、医療の負荷が増大

具体的な要望事項

- 9月26日 武見厚生労働大臣あて 小池東京都知事名で緊急要望

都民・国民の命と健康を守るとともに、医療現場の負担を軽減するため、発病・重症化の予防に効果のあるインフルエンザワクチンの接種促進や医薬品の安定供給を図る必要があることから国に要望

1 インフルエンザワクチンの接種促進

- (1) 早期接種に向けた周知
- (2) ワクチンの確保

2 医薬品等の安定供給

- (1) 抗インフルエンザ薬等の適切な供給
- (2) 鎮咳薬や鎮痛解熱薬の供給調整等
- (3) サプライチェーンの強靱化

インフルエンザの予防・対策等に関する情報
(東京都感染症情報センター)

【リンク先】

<https://idsc.tmph.metro.tokyo.lg.jp/diseases/flu/flu/>

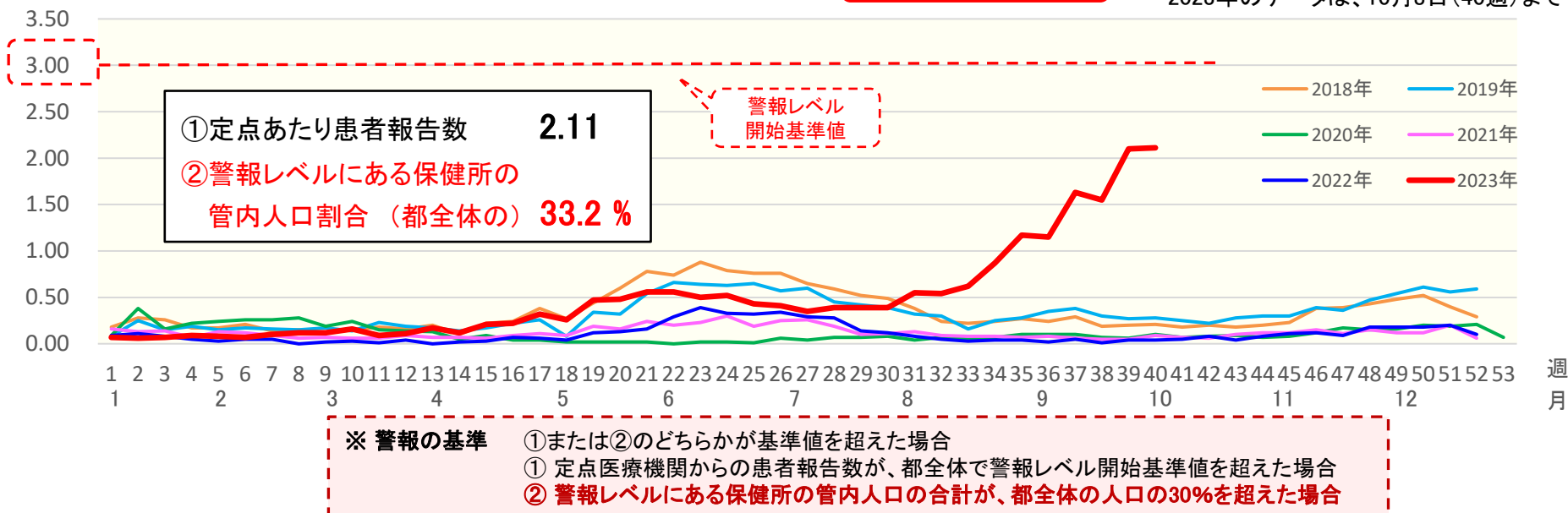


咽頭結膜熱（プール熱） - 5類感染症 -

都内における週別定点あたりの患者報告数

警報レベル

2023年のデータは、10月8日(40週)まで



流行の時期等

参照：厚生労働省ホームページ、東京都感染症情報センターホームページ

- 通常は6月頃から徐々に流行しはじめ、7～8月にピークを迎える
流行は主に夏期で、プールでの感染があることから「プール熱」とも呼ばれる
- 都内では、本年8月以降に急拡大し警報レベルに（大阪・福岡等では患者報告数が3.0を超過）
- 1999年の統計開始以降、都内の咽頭結膜熱報告数の警報レベルは初めて

病原体と主な感染経路

【病原体】 アデノウイルス(感染力が非常に強い)

【飛沫感染】 患者の咳やくしゃみなどのしぶきに含まれるウイルス

【接触感染】 ウイルスが付着したタオルなどの患者が触れたもの等に触れた場合

咽頭結膜熱（プール熱） - 症状と予防・対策等 -

参照：厚生労働省ホームページ、東京都感染症情報センターホームページ

咽頭結膜熱の症状等

- 発熱、頭痛、のどの痛み、結膜炎といった症状を来す
- 高熱が比較的長く（5日前後）続くことがある
- 特別な治療法はないが、ほとんどの場合は自然に治癒する

予防・対策等

- 流行時は、流水とせっけんによる手洗い、うがいをしましょう
- 感染者との密接な接触は避けましょう
（タオルなどは別のものを使いましょう）
- プールから上がったときは、シャワーを浴び、うがいをしましょう



- 高熱が続く、ぐったりしている、せきが激しい、吐き気、頭痛の強い時などは医療機関に相談してください

都におけるエムボックス対応について

1 エムボックスについて

2 世界での患者の発生状況

3-1 都内及び国内での患者の発生状況

3-2 都内患者の検体ゲノム解析

- 分子系統の解析 -

4 都の対応

-1 対応初期及び感染拡大期の対応

-2 普及啓発・対応の方向性

1 エムポックスについて - 4類感染症 -

※ 感染症法施行令の改正により、国内では「サル痘」から「エムポックス」に名称が変更（2023.5.26）

- ・ 2022年5月以降、従前の流行国への渡航歴のないエムポックス患者が世界各地で報告
- ・ WHOは、2022年7月23日、感染の拡大が続いているとして「**国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）**」を宣言 ⇒ **2023年5月11日緊急事態の終了を宣言**

エムポックスの症状等

（参照：厚生労働省ホームページ・国立感染症研究所ホームページ）

- ✓ エムポックスはエムポックスウイルスによる**感染症**で、1970年にヒトでの感染が発見されて以来、中央アフリカから西アフリカにかけて流行
- ✓ ウイルスは大きく分けて、コンゴ盆地系統群：クレードⅠ、西アフリカ系統群：クレードⅡの2種類
クレードⅡは、サブクレードとしてⅡa、Ⅱbが設けられている
クレードⅠは、クレードⅡに比較して重症化しやすく、ヒトからヒトへの感染性が高いとされている
（国内での感染例は、**クレードⅡ**が検出）
- ✓ 主にアフリカに生息するリスなどのげっ歯類をはじめ、サル、ウサギなどウイルスを保有する動物との接触によりヒトに感染
また、感染した人や動物の皮膚の病変・体液・血液との接触（性的接触を含む）、患者との接近した対面での飛沫の長時間曝露、患者が使用した寝具等との接触等により感染
- ✓ ウイルスに曝露後、通常6-13日（最大5-21日）の潜伏期間の後に発症
発熱、頭痛、リンパ節腫脹などの症状が0-5日程度持続し、発熱1-3日後に発疹が出現
多くの場合2-4週間持続し自然軽快するものの、曝露の程度等により重症化する場合あり
- ✓ **日本では感染症法上の4類感染症** 特異的な治療法はなく、国内では対症療法が中心であるが、欧州で特異的治療薬として承認されている「テコビリマット」を用いた特定臨床研究を実施

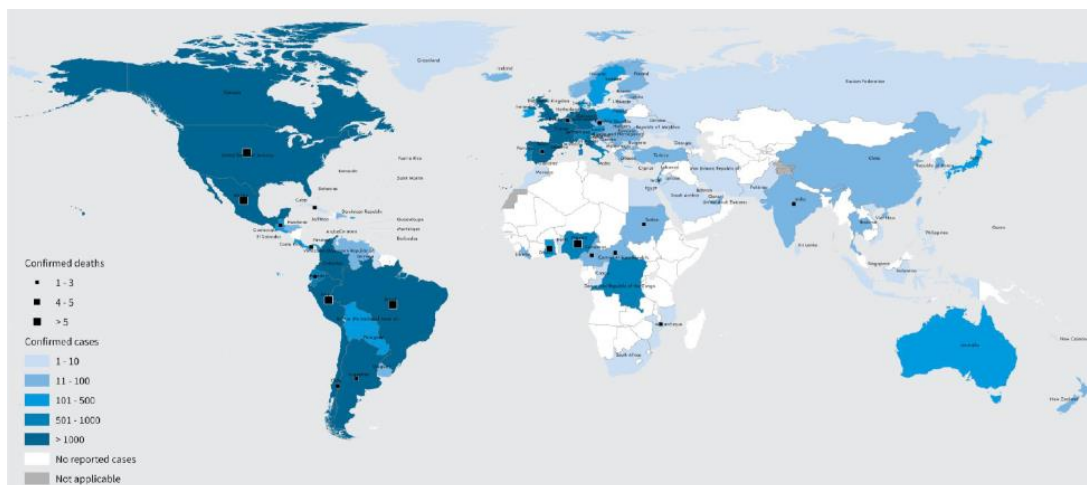
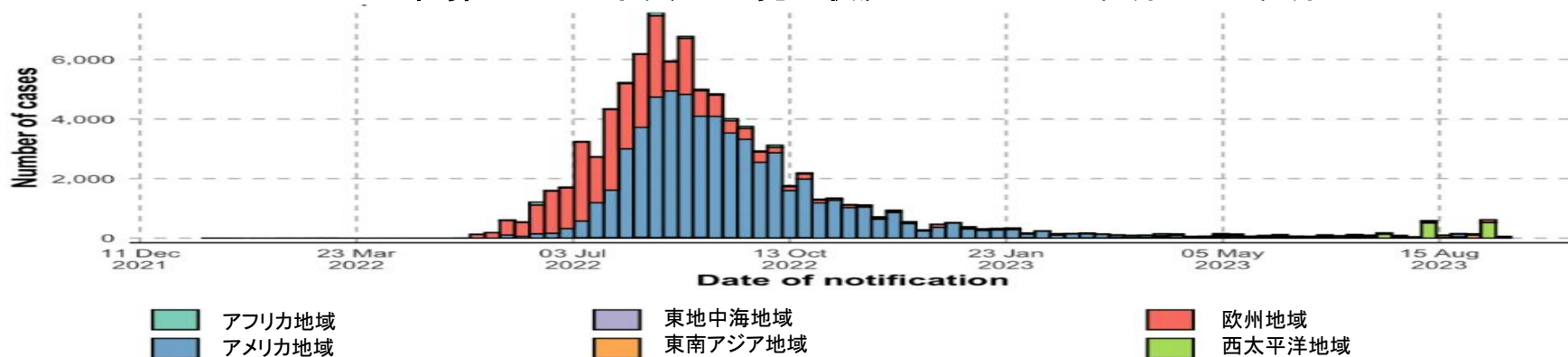
2 世界でのエムポックス患者の発生状況

(参照: 厚生労働省ホームページ・国立感染症研究所ホームページ・各自治体ホームページ)

- 2022年5月以降の流行では、世界で9万人以上の感染例が報告
WHOによると、患者の大部分は男性であるが、小児や女性の報告例もある
- 多くは自然軽快するが、小児や妊婦、免疫不全者で重症となる場合があり、2022.1.1～2023.5.2の全世界で死亡例は130例（国内での死亡例は無し）
- 日本国内で報告されている患者は、すべて男性

世界でのエムポックスの発生状況

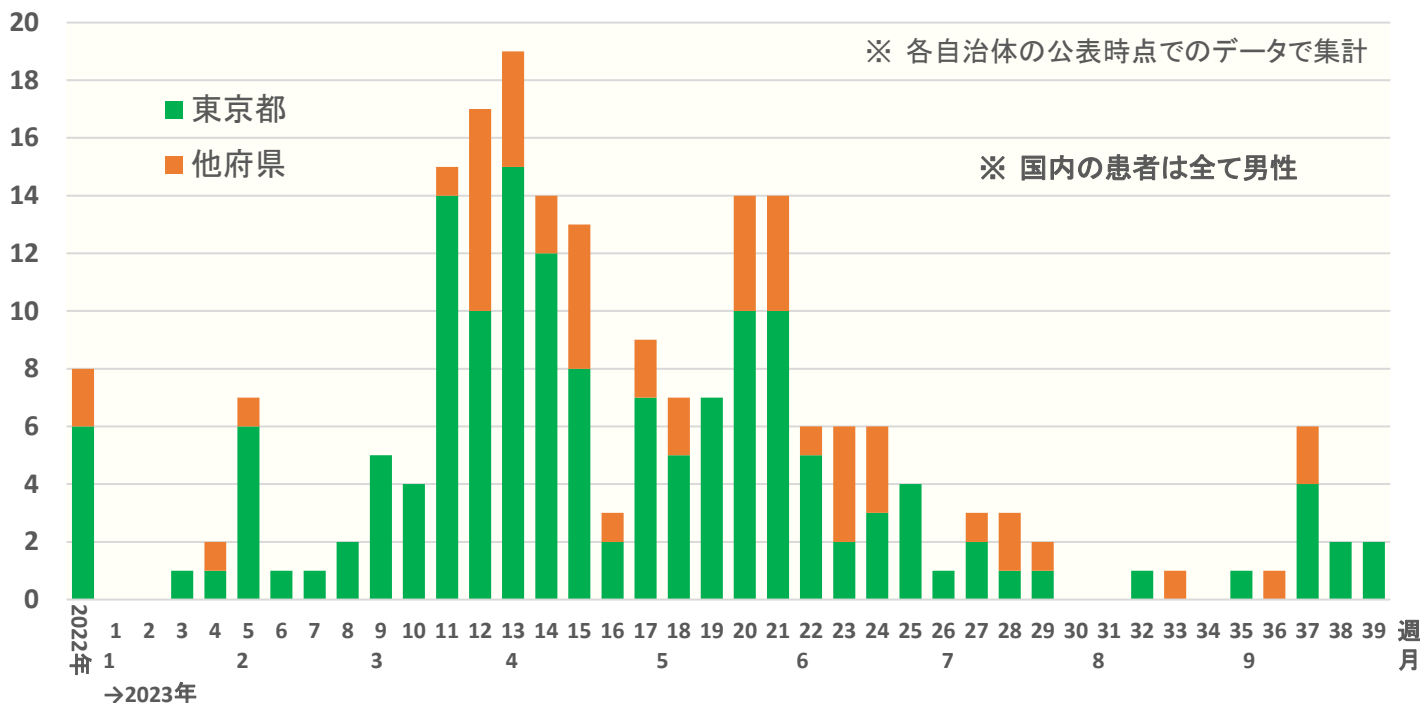
2022年1月～2023年9月17日



3-1 都内及び国内でのエムポックス患者の報告状況

- 2022年6月下旬～7月中旬にかけて欧州に滞在した旅行者が、帰国後に倦怠感を感じて7月25日に都内の医療機関を受診
- 同日、検体を調べた結果エムポックスウイルス陽性と判明（国内最初の感染例）
- その後、2022年内は少数の患者発生が確認、2023年に入ると患者の増加がみられている
- 都内では2023年3月以降報告件数が増加したが、6月以降は減少

国内におけるエムポックス患者の報告状況（2022年7月25日～2023年10月6日）



公表自治体別の患者人数

自治体	人数
東京都	156
他府県	52
計	208

都内の年代別の患者人数

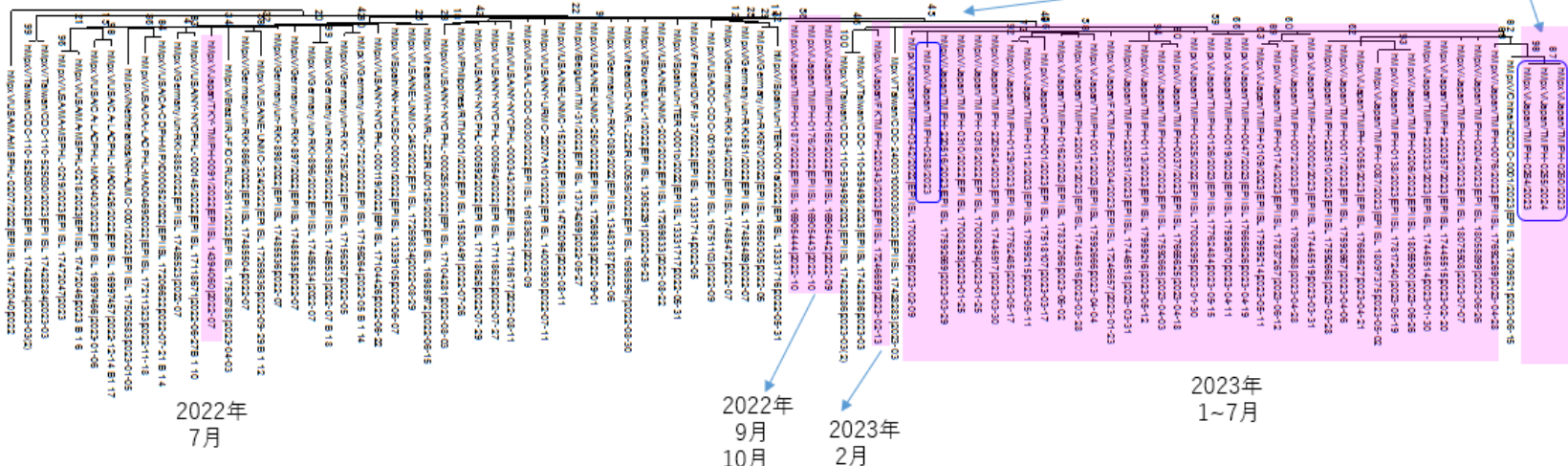
患者の年代	人数
10代	1
20代	24
30代	57
40代	62
50代	8
60代	3
70代	1
計	156

3-2 都内患者検体のゲノム解析 - 分子系統の解析 -

東京都健康安全研究センターでの分析より

- 都内の患者から検出されたエムボックスウイルス45株をゲノム解析
 - ・ 2022年7月第1例 : B.1株
 - ・ 2022年9月～10月、2023年2月以降のもの : B.1.3株
- 2022年9月以降の株は比較的近縁のウイルスだが、遺伝子配列に変異の蓄積あり
2022年末に一旦国内の流行が終息したものの、2月頃の輸入例から感染が拡大
- 2023年9月に検出された4株(青枠)のうち3株は、これまでに国内で検出されたものと遺伝子配列が異なる

Japan・GISAID登録株 : 46株 (東京45株、大阪1株)



遺伝子配列の異なる3株

B.1

B.1.3

東京都内検出株

4-1 都の対応 – 対応初期及び感染拡大期の対応 –

都の対応状況(対応初期～)

- 感染症指定医療機関に対して診療に関する協力を要請(2022.6.23)
- 健康安全研究センターでの検査実施体制を構築
- 東京iCDCワnhルス・アプローチ推進タスクフォースを開催(2022.7.11)
 - ・ エムボックス発生時の対応(リスクアセスメント、都の対応等)を協議
- 東京都サル痘連絡会議を開催し情報を共有(2022.7.26)(7.25都内で国内最初の感染例確認)
 - ※ 東京都サル痘連絡会議は、2023年5月8日付で廃止し、東京都感染症連絡会議に統合
- 都民に対して「症状や感染経路等の注意点」をお知らせ

都の対応状況(感染拡大期～)

- 相談・診療体制の構築
 - ・ 都立病院での相談・診療体制を構築、対応可能な医療機関として都のホームページで公表
医療機関: 広尾病院、駒込病院、豊島病院、荏原病院、墨東病院、多摩総合医療センター
小児総合医療センター、松沢病院(計8病院)
 - ・ 都立病院以外で公表に同意のあった医療機関についても、都のホームページで公表
医療機関: 東京大学医科学研究所附属病院、慶應義塾大学病院 聖路加国際病院
 - 普及啓発
 - ・ 医療機関向けの研修会を実施(令和5年6月/講師: 忽那賢志氏 大阪大学医学部教授 感染制御学)
 - ・ 高リスクグループ(複数の性的パートナーがいるゲイ、バイセクシャル、その他MSMを自認する者等)に対する啓発のため、イベントの主催者や店舗のオーナー向けリーフレットを関係機関※と連携して作成、配布(次頁参照)
- ※ 国立感染症研究所、NCGM、MSMコミュニティのCommunity Based Organization(CBO)、厚生労働省、自治体が協働して情報発信



4-2 都の対応 - 普及啓発・対応の方向性 -

啓発用リーフレット

お店やイベントで

mpox の感染リスクを減らすために (サル痘)

日本でmpox感染の報告が増えています！

2023年から日本の複数の地域で増えています

海外では、男性同士の性的接触での感染が多く報告されています

mpoxに感染したかも...
そんな時は、性的接触(セックス、キス)、直接の接触などはひかえましょう

※mpoxには、年齢、性別、性的傾向、性自認などに関わらず、誰でも感染する可能性があります。

お互いの感染リスクを下げるには？

- 体調が悪いときは、お店やイベントに行くのをひかえよう
- リスクが高い状況を避そう
- お店やイベントで体調不良に気付いたら
 - できれば、帰って休みましょう。
 - 他に濃厚接触の機会(プップツ)や体ぶくれ、カサタなどがあったら、すぐにその部分をご一せや服などでおおひましょう。
 - 替っていたら、マスクをしましょう。

感染リスクが高い状態

- 肌と肌が触れ合う可能性が高い
- 参加者の濃度が濃い
- 飲み物をシェアしている
- 多くの人とキス、ハグ、セックスする

そして、できるだけ早めに医療機関を受診！

詳しくはこちらへ

厚生労働省

国立国際医療研究センター

HIVマップ

東京都

【お問い合わせ先記入欄】 感染症コミュニケーション円卓会議 © 2023年4月7日

お店のオーナー、スタッフ、イベントの主催者の方に

3つのおねがい

1 正しい最新の情報の確認

Mpoxについて正確で最新の情報を取得してください。
国の研究機関などで、最新の情報を見ることができます。

表面にQRコードがあります

2 体調不良の人と他の人との接触を減らす

- ✓ 体調が悪い場合勤務や参加を控えてもらう
- ✓ プップツをおおってもらう
- ✓ マスクをつけてもらう
- ✓ 医療機関を受診をすすめる

! mpoxはこんな症状にも要注意

発熱、頭痛
のどの痛み
リンパ節の腫れ
発疹
肛門の痛み
筋肉痛
倦怠感

水ぶくれを伴う発疹(*)が特に、性器および肛門の周り、口の周りや中に現れる

リンパ節の腫れ
リンパ節が最も多く集まる箇所は、首、鎖骨の周り、むくみの下、腕の付け根

潜伏期間(感染してから症状が出るまでの期間)は約6〜13日(長いときは5日、短いときは21日の場合もある)

3 情報公開も重要

Mpoxは、感染した人の発疹(プップツ)やカサタ、体液などに触れること、近くで飛沫を長時間浴びることで感染が起きます。

そのため、濃厚な接触、肌や粘膜同士の接触に注意が必要です。右の内容について、スタッフやお客様に伝えるようにしましょう。

SNSやホームページなどで

- ✓ 症状の基準など
- ✓ 参加当日、来場前に、体調をご自分で確認いただくよう周知
- ※特に熱、発疹(プップツ)、のどや肛門の痛み

お店や会場などで(例えば、トイレのドアなど)

- ✓ お客様、スタッフ向けの感染予防情報を提示
- この資料の表面も、ご利用ください

対応の方向性

- 引き続き、感染防止対策等の注意喚起を実施
- エムボックスでの経験を新興感染症等発生時の対応に活用